

フィリピン人類学協会第 41 回年次会議（UGAT41）参加報告

辻 貴志

（佐賀大学大学院農学研究科・特定研究員）

2019年11月7日（木）から9日（土）にかけて、フィリピン・レイテ島南部バイバイ市のビサヤ州立大学（Visayas State University: VSU）[図 1]で開催された「フィリピン人類学協会第 41 回年次会議（UGAT41）」に参加した。



図 1.会議の会場となったビサヤ州立大学の様子（2019年11月7日、筆者撮影）

フィリピン人類学協会（The Ugnayang Pang-Aghamtao, Inc.: UGAT）は 1970 年代にフィリピンで胎動した国家的組織であり、フィリピンの学術の双璧を成すフィリピン大学とアテネオ大学を中心に運営されている。フィリピン各地で年次会議を開催し、学術雑誌“*Aghamtao*”を刊行する等の活動を展開するフィリピンで権威ある人類学会である。

第 41 回年次会議は、フィリピン人類学協会とビサヤ州立大学の共催で、“Food (In)security: An International Conference on Anthropology of Food and Eating”をテーマに、

「食」にまつわる活発な議論が幅広く繰り広げられた[図 2]。パネル発表の数は 31 に上り、計 122 人による個別発表が行われた他、メルボルン大学、シドニー工科大学、カンボジア王立アカデミー、フィリピン大学、アテネオ大学、先住民知識博物館 (Museo ng Kaalamang Katutubo) から招聘された 7 人の基調講演や特別講義に加え、民族誌映像上映会、東南アジア関係及び“*Aghamtao*”等の書籍販売会も組み込まれた。開会時には、国歌斉唱・開会の挨拶・会議の趣旨説明が行われたが、こちらは参加できなかった。



図 2.会議での基調講演の様子 (2019 年 11 月 7 日、筆者撮影)

「食」を巡る問題は多様であるが、本会議は「食の安全と不安」を共通認識として貫徹し、人類学とその周辺領域に留まらない、学術分野を超えた多種多様な発表や議論が繰り広げられた。「食の安全と不安」とは、例えば、エルニーニョ現象や旱魃による農作物の不作、貧困による食料獲得の困難さ、収奪的漁業や中国との領海紛争による海産資源の減少等、フィリピン並び世界で発生している解決しなければならない同時代的問題がある。また、本会議は一貫した認識を持つにも拘らず、その切り口は極めて多岐に渡る。パネルの一例を示すと、グローバル化、政治経済、気候変動、食の問題化といったマクロな問題を扱う提起や、食習慣、生計戦略、越境、先住民、エージ

エンシー、文化遺産、歴史といった時勢的なテーマを取り扱う研究、持続性、安全性、哲学、倫理、知識、健康、芸術、癒し、災害、観光、人類生物学といった諸分野に関わる架橋研究等がある。とりわけユニークな着眼点のものには、フィリピン国内でマクドナルドよりも規模が大きくシェアが高いハンバーガー店 *Jolibee* に関するパネルが企画された。さらに、本会議では、プラスチックの海洋投棄や過剰利用に対して問題意識を高めるために、ペットボトル飲料の持ち込みを嫌厭し、食と環境との関係について考える雰囲気醸成されていた。筆者は本会議の31のパネルの内5つのパネルに参加すると共に、パネルの発表者及び座長を努めた。以下では、発表者・座長として関わったパネル及び第41回年次会議の総括を行う。

1. パネル「飲食の民族誌」(発表)

筆者は「飲食の民族誌」というパネルの4人の発表者の1人として、東南アジアでフィリピンとインドネシアでしか搾乳されてこなかった在来スイギュウ乳の歴史的利用と、在来種が高乳量のムラ一種に急速に置き換わりつつある現代のスイギュウ乳利用の変化について、**Traditional Water Buffalo Milk Production and the Beyond in the Philippines** というタイトルで発表した。2人目の **Emily Roque-Sarmiento** 氏(アテネオ大学マニラ校)は、大衆向けビールではなく、フィリピン独自の地ビールについて取り上げ、高価にも拘らず地ビールの魅力が徐々に愛好者によって国内に広まりつつあることを報告した。3人目の **Ramces Red** 氏(フィリピン大学ディリマン校)は、ヤシ酒、ビール、ジンの社会内での飲用のされ方について報告し、程良いアルコールの摂取が人々の社会関係を密にすることを再確認した。4人目の **Ariel Bosque** 氏(リサール工科大学)はフィリピンのコーヒーショップについて発表し、コーヒーがフィリピン人にとって欠かせない歴史ある文化的な飲料であることを示した。本パネルでは、以上のトピックに対して各飲料の定着及び発達過程について主に質疑応答が行われ、それぞれの飲料がフィリピンの基礎的かつポピュラーな飲食文化であることが確認された。

2. パネル「ビサヤ地方の地域食」(座長担当)

座長を努めたパネル「ビサヤ地方の地域食」では、4人が登壇した。1人目の **Mildred Siarez** 氏(ビサヤ州立大学)はヤシ酒生産の工程を詳細に発表し、現代社会におけるヤシ酒生産の意義と可能性について報告した。2人目の **Sanida Daomani** 氏(**Sama-Badjau**)は漂海民として知られる在野のバジャウの研究者で、発表者の生活経験に基づくセブ島に居住するバジャウの間でのサゴ澱粉利用の多様な知識を披露した。3人目の **Sonny Bechayda** 氏(サンカルロス大学)は、ビサヤ地域のコミュニティでの食料生産、調理、食事の詳しい観察に基づく調査結果を報告し、コミュニティの食生活の実態を明らかにした。4人目の **Daryl Watin** 氏(聖テレサ大学セブ校)は、ビサヤ地方に

おけるパンノキの利用の文化誌を報告し、パンノキが単なるフルーツではなく、救荒食としても重要である旨を強調した。本パネルは、人々の行動や生業、生態について巧みにまとめられており、生態人類学や東南アジア・オセアニア地域文化研究の見地からも人類の食への対応や適応について考える有益な機会であった。

3.第 41 回年次会議の総括

本会議では、生態人類学や人類生態学のような定量的なデータをしっかりと示した発表は確認できなかった。「食」を捉えるにあたり生計や生業に関する専門的な発表は数える程であり、大半は文化人類学的な理論や抽象論に基づいた発表であった。インターネット上の情報に依存した発表も散見され、生のフィールドデータから現状を把握し、発見された諸問題への取り組みの態度に真摯ではない印象を強く受けた。これは、それらの発表者らが、フィールドワークに多く時間を割くことが難しい組織に属しているためと推測される。その他、閉会時に本会議の総括と今後の展望等について議論の場が設けられなかったことから会議の方向性が不明瞭になっていく可能性がある。

「食」は人類学にとって一つの普遍的かつ基礎的関心事であることから、様々な「食」に関する人類学的研究がこの機会に一堂に会した。そして、「食」の世界は多元的であり、3日間の会議ではとても捉え尽くせないことを再確認した。また、本会議への参加によって「食」がどの世界においても共通して深い次元にあることを再認識し、メインテーマである「食の安全と不安」についてフィリピン国内の視点とグローバルな視点の双方向から知見を深めていく足がかりを得ることができた。

また、各会場に 30 人から 100 人ほどの聴衆が訪れた。発表のほとんどがフィリピンに関する人類学的研究であったが、考古学、社会学、植物学、栄養学、歯学などの分野からの発表も確認できた。地域的には、フィリピン以外に、アメリカ、香港、インドネシア、その他の東南アジアに関する発表もあったが、いずれもフィリピンと結び付けられた内容であった。

第 41 回年次会議は、フィリピンやフィリピン人の「食」に関する報告を対象としたフィリピン大学、アテネオ大学の関係者が中心で (35%)、そのほかホスト校のビサヤ州立大学、セブ島のサンカルロス大学、ネグロス島のシリマン大学、マニラのサントトマス大学、デラサール大学、マカティ大学などのパネルが確認できた。これら以外の大学からの参加者は少数であった。発表者の 96%が大学の研究者で、医療関係者、政府関係者、在野の研究者らの参加は 4%に過ぎなかった。日本からの発表者は筆者のみで、参加者も確認できず、フィリピンを対象とした日本人研究者に本会議の情報が周知されていないように感じられた。外国人は基調講演者らを除き、極めて少ない参加状況 (4%) であったが、日本 (筆者)、タイ、インドネシア、カンボジア、オーストラリアからの発表者を確認した。

質疑応答は盛んに行われた。フィリピン人研究者はコメント力に優れており、手短かな質疑応答や事実確認よりも議論や対話を好む傾向にあった。一方で、あからさまな批判は好まれず、日本との研究文化の差異を感じた。筆者が初めて本会議に参加した約 20 年前の基調講演で日本の高名な人類学者が「なぜ、フィリピン人研究者はフィールドワークをしないのか？」という挑発的な発表を果敢にされていたが、ひんしゆくを買っていたのを記憶している。また、発表言語は基本的に英語だが、タガログ語で発表・質疑応答する人達も中にはいた。

本会議の合間には、コーヒーや間食、昼食や夕食の時間も設けられ、懇親の機会は十分に保たれていた。しかし、いわゆる「フィリピン時間」により会議が時間通りに進まなかったものの、速やかな会議の進行を求めている参加者は少ない様子であった。

閉会時には、学生を対象とした論文賞 (E. Arsenio Manuel 最優秀論文賞) の発表が行われ、若い世代の研究意欲をかき立てる試みも見られた。会議終了後には、会員総会が行われ、会計報告や次年度の計画等が議論されたが、2020 年度の開催地については発表されなかった。

総会終了後、市場、漁村、森林等、レイテ島において、フィリピン大学レイテ校に次ぐ有力なビサヤ州立大学周辺の生態資源を利用したスタディーツアーが催された。スタディーツアーには参加しなかったが、森林についてはビサヤ州立大学の教員に案内頂き、キャンパス内にフィリピンメガネザル等の希少生物も棲息する立派な原生林を有していることを確認した。

4. フィリピン人類学協会について

今回の開催地を始め本会議への概要及び参加は協会のブログ (ugat-aap.blogspot.com) もしくはフェイスブック (<https://www.facebook.com/groups/ugat1978/>) にて参照できる。フィリピン人類学協会の会員になる場合、年間 1,000 ペソ (本稿執筆当時約 2,160 円) の会費を支払うと会議参加費の割引や、“Aghamtao” 1 冊を受け取ることができる。本会議には、フィリピンの人類学界の重鎮から若手まで、人類学を専門とする研究者や学生が数多く集うことから、フィリピンの人類学の動向を探り、情報交換をしたり、共同研究を立案したりする上で有意義である。また、フィリピンを対象とした日本の人類学のレベルをフィリピンの人々に知ってもらい、フィリピン人でなくては深くわからないことを教授頂く上でも絶好の機会となるだろう。